
掌編小説集

- はらた・はじむ …………… 消えた絵
野川紀夫 …………… 主人の顔
大川義郎 …………… 姉と弟
○松島武治 …………… 夫 婦
稲葉寿子 …………… 共保の母と子
石川久 …………… 夕暮れどき
加藤茂行 …………… 五人の家族

8月19～20日

1972 文学ゼミナール研究作品

文学同盟名古屋支部

夫 婦

松島 武治

松竹梅男の生活は極めて単調であつた。朝はいつも三度妻君に起こされ、三度目に床を出る。妻君に非難がましく「眠いじゃないか」と愚痴るのも日課の一つだ。

便所を出て顔を洗い、食卓につく時は必ず妻君が茶碗に御飯をよそっている。彼はそれを見て、ああ今日も一日無事に過ぎるなという安心感を持つ。テレビの画面に出ている時間を横目に新聞を読み、いつも記事の途中でアパートを出る。

夜は夕食のあと、テレビを見たり妻君とだべったりする。九時半頃風呂に出掛け、床に入る。二日に一度妻君と交渉をもち、心身共に満足して眠る。

彼は△△アイスマシンという会社のセールスマンをしている。製氷機を喫茶店や食堂に売る仕事だ。成績は普通で給料も普通。中々売れない時は妻君や会社の事務の

女の子に八ツ当りし、調子のいい時は上機嫌で一杯ひっかけ、その夜の床の中で妻君に酒くさい愛の言葉をまき散らした。

彼は妻君を愛していると思つていた。夫婦は愛し合つているもので、でなければ一緒に暮せるはずがないではないか……。一体世の中に自分達ほどうまく行つている夫婦があるだろうか？ 妻君に不満がなくはない。が、少々気が効かないといつてそれが何だ。その場合は怒つてもすぐ後で許している。大体そうした些細な事が気になるのは他に気にする問題がないからで、うまく行つている事の証拠みたいなものだ……。

彼は妻君に大体において満足していた。まあまあ美人だし、体もよかつた。ところでそれは彼が他の女に目を向けることを妨げはしなかつた。彼は仕事でよく若い女と会つたり話したりするが、短いスカートから長いきれいな足が延びているのを見ると、むやみにスカートの中を覗いてみたい気がした。妻との交渉には不満がなかつたから、彼は自分は性欲過多ではないかと思つたりした。

屋中、彼の心にとまるような女を見た時、彼は夜、妻君を抱えている時にその女と交渉している空想をしたり

改妙

した。それは彼の欲情を高め、妻君を喜ばせる事ができたので、別段妻君に悪いとは思わなかった。とはいへ、やはりそれは妻君に対する彼の秘密の一つに違いなかつた。
妻君の個性が
でてこま

或る日、彼が会社から帰ると、妻君は一通の手紙を彼に渡した。彼はハテという顔で差出人を見たが、急に心
生のこぼか使え臓がドキンとしたのを感じた。桜川菊子からだつた。彼
あてニテミスか
えしい。
食の仕度をしてる。

「何時頃来たネ？」

彼はとぼけた調子で妻君に話しかけた。我ながらくだらない質問だと思つたが、妻君の心境をはかるためだつた。
対等に書い
こんなこか
た。な

「そうねえ、お昼過ぎごろでしたわ……。なぜ？」
「いや、別に……」

妻君の返事は普段と変わらない。彼は少しホツとした。

はやる気持ちを押さえ、彼は先に食事を済ませようと、手紙を奥の部屋の机の上にてできるだけ無雑作に置き、食卓についた。

考えてみれば、菊子とは別に妻君に隠すようなことが

あつたわけではない。大学時代からの友人で、結婚前に二・三度清らかなデイトをしたに過ぎない。彼は妻君の顔をうかがうような気持になつたことを幾分腹立たしく思つた。

「手紙、どなたからなの？」

「大学時代の友達だよ。同窓会の連絡か何かだろう」

「ほんとかしら、あなたは気が多い人だから」

妻君はからかうように笑つた。

「ばか！ 変な風にとるんじゃないぞ！」

彼は妻君の冗談が気にさわつた。妻君の言つたことはまちがいはないが、菊子もその一人というのには腹が立つのだ。

妻君はまた気の効かないことを言つたと思つて黙つてしまつた。

彼は早めに食事を終えて、奥の部屋で手紙を読んだ。そしてまた心臓がドキンとするのを感じた。

「……今月で病院を退職することになりました。来月には結婚式を控えていますので落ち付かない毎日です。他のお友達にはまだ知らせてありませんが、松竹さんからは去年お手紙をいただいたままでしたので、お返事がてら簡単にお知らせします。式後は○○に住む予定です。

暫くは遠いお別れですが、落ちつきましたらお手紙しますのでぜひ一度奥様とお遊びにおいで下さい。奥様にくれぐれよろしくおつたえ下さいませすよう。
お元気で。

「菊子」

「……………」
彼は狼狽した。菊子なしでは生きられないと思つた時
もあつたが、それはもう過ぎたと思つていた。自分は大人になり、若い頃の甘い気持から卒業したと思つていた。
それがどうだ……!?

彼が菊子の結婚を妬んだ。相手の男が憎かつた。自分
以外の男があゝの菊子の身体を抱くということが何とも言
えない非情なことのように思われた。

ガチャン！と、食器の割れる音がした。妻君が台所
で洗い物をしてまた皿を割つたのだ。彼はふと台所の方
へ目を向けた。

「ごめんなさい、またやっちゃつた……」

臆病な目をして小さな声で妻君が謝つた。こんな時、
いつも彼はどなつた。しかし今、彼はどならなかつた。
彼は皿の割れる音を聞いた時、自分が結婚していること
にやつと気がついたのだ。